

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520557

研究課題名(和文) 高校生の沖縄語使用についての調査・研究：消えていく言葉の中で何が残っていくか？

研究課題名(英文) The Investigation and Research of Okinawan Word Usage by High School Students: What Will Remain from the Missing Languages?

研究代表者

佐々木 香代子 (Sasaki, Kayoko)

琉球大学・留学生センター・准教授

研究者番号：60305216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：宮古・八重山地方を除く沖縄県内全日制公私立高校生3,496名に対し、質問票および記述回答で調査を実施した。その結果、両親ともに県内出身、県内で就職・進学を希望する生徒、南部地域が沖縄の言葉を使用する傾向が高いことがわかった。また、沖縄の言葉を記述する回答では、文レベルで沖縄の言葉が使えない状況が明らかになった。

方言の動詞と形容詞の活用形、喉頭破裂音、語中や語尾の長音の地域差が失われていく一方で、日常的に頻繁に目にする動物や食べ物の語、共通語の活用形を使うことによって方言の動詞や形容詞が残って行く可能性、程度を表す副詞のバリエーションが多く、今後も使用が増えていく可能性が考察できた。

研究成果の概要(英文)：A survey was conducted on 3,496 senior high school students in Okinawa, excluding the Miyako and Yaeyama. The study produced the following results: For students: 1) whose parents are both from within Okinawa Prefecture, 2) who wish to find a job or to enter a higher-level school in Okinawa, and 3) who live in the southern part of Okinawa showed a marked trend toward using Okinawan words. From written responses that required the students to write Okinawan words, it was ascertained that they can't use Okinawan words at the sentence level.

While the conjugation of verbs and adjectives, guttural plosives, or regional differences between dialects in long vowel sounds at the beginning or end of words are disappearing, the study shows the possibility of words for animals and food which are seen very often in daily life, and dialect verbs and adjectives will persist by using the conjugation of standard Japanese. There is also the possibility of increasing usage of proportional adverbs.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：言語生活 沖縄語 高校生

### 1. 研究開始当初の背景

沖縄で生活する留学生は日本語が少しかけるようになると、「教科書には出てこない」「沖縄の言葉」にとまどう。沖縄には、ウチナーグチと呼ばれる言葉(方言)だけでなく、共通語との接触により出来た新しい方言とも言われるウチナーヤマトグチがあり、沖縄の人々の話し言葉の中にはこういった言葉が共通語と共に存在する。が、一般に「日本語教育」では、こういった「地域の言葉」は教科書に取り上げられることはなく、教室でも教えられることはないため、留学生が日常生活の中でこうした言葉に接した時、とまどうだけでなく、ディスコミュニケーションを起こしている可能性も高い。

留学生がもし地域の言葉である方言やウチナーヤマトグチを理解できたら、沖縄の人々とのコミュニケーションが円滑に進むだけでなく、その言葉の背景にある沖縄の文化を理解する上にも役に立つのではないかと。更に、これら地域の言葉を学ぶことを通して、日本語の多様性、ひいては日本文化の多様性を知ることができるのではないかと。そういった思いから、現在、我々「沖縄語教材開発グループ」は、沖縄で生活する留学生用の、方言やウチナーヤマトグチを理解することを目的とした「沖縄語学習教材」を開発中である。

上記教材開発の過程で、日頃、留学生が接触する事が多い若い世代の沖縄の人々は、実際、どの程度方言やウチナーヤマトグチを使用しているのか?という疑問が生じてきた。

沖縄方言の使用についての調査・研究によると、現在、方言のみを日常的に使用している人々は80歳以上の高齢層(但し、都市部と農村・漁村部では方言のみを日常的に使用している人々の割合が異なる)に限られており、沖縄の人々のほとんどが方言とウチナーヤマトグチ、共通語を混ぜて使用している。そして、年齢が下がるほど、ウチナーヤマトグチと共通語の割合が高くなり、方言の使用は減少する。が、若い世代の沖縄の人々が方言を全く使用していない訳ではなく、最近では、「方言の若者言葉」の存在も指摘されている。このように、若い世代の沖縄の人々がウチナーヤマトグチと共通語を中心とした言語生活を送っている一方で、限定的に方言を使用していることは今までにも指摘されていることであるが(かりましたひさ「沖縄若者言葉事情 琉球・クレオール日本語試論」『日本語学』25-1(2006))では、具体的に、沖縄の若者が「どういった言葉」を、「どの程度」使用しているのか、といったことについての量的な調査・研究は行われていない。そのため、我々が開発中の教材に取り入れるべき方言あるいはウチナーヤマトグチを選択する拠り所とするべきデータがない。

こうした状況の下、本研究グループは、教

材開発を進める一方で、留学生とその家族が日頃接触する機会の多い大学生の「沖縄語使用」に関する調査を県内4大学(琉球大学、沖縄国際大学、沖縄大学、名城大学)で2010年7月~8月に実施し、約450名の学生から回答を得た。その結果、我々が予想した以上に沖縄語の使用が限定的になっている様子が明らかになった。

だが、上記結果は「大学生」という特定の集団についての結果であり、これを「沖縄の若者」一般の傾向と判断するのは早急に過ぎる。本研究は、そこで、「沖縄の若者」の沖縄語使用状況を明らかにするため、上記大学生対象の調査結果を踏まえ、沖縄県内の高校生を対象に調査を実施した。

### 2. 研究の目的

本研究グループは、2010年に大学生が日常的に使用している沖縄語を調査したが、その結果、(1)方言よりウチナーヤマトグチを使用する傾向、(2)方言を聞けるが話せない状況、(3)大学生が「沖縄の方言」と理解し、回答した語の半数が単独の語レベルであり、名詞であること、(4)全国共通語の中にウチナーヤマトグチと方言を入れ込む形で発話していることが明らかになった(尚・佐々木・狩俣(2013))。本研究では、上記結果を踏まえ、方言とウチナーヤマトグチを対象に、県内高校生が日常使用している沖縄語の使用の度合いを調査し、地域、性別、学年、将来の志向、両親の出身地との関連性および県内高校生の沖縄語使用の現状(どのような言葉が使われ、どのような言葉が使われなくなっているか)を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

2010年に県内4大学で実施した調査結果を基に、質問票対象語となる沖縄語を選定し、その使用および理解についての質問票を作成した。これに、自由記述回答を加え、アンケートを作成した。アンケートは、宮古・八重山地方を除く沖縄県内(那覇・浦添、南部、中部、北部)の全日制公私立高校で、1年生および3年生を対象に実施した。アンケート回収後、質問票、自由記述回答をそれぞれデータ入力した。

質問票についてはSPSSを用いて統計処理を行い、(1)現在の沖縄の高校生の沖縄語(方言およびウチナーヤマトグチ)の使用状況、(2)地域差の有無、(3)性差の有無、(4)学年差の有無、(5)沖縄県内で大学進学または就職を予定している高校生と、沖縄県外で大学進学または就職を予定している高校生との間の差異の有無、(6)両親の出身による差異の有無、の順に分析を行った。

自由記述回答については、(1)語の出現数、(2)品詞別出現数、(3)語種別出現数、(4)語と文の割合について記述統計を行う一方、高校生の使用する沖縄語の傾向を分析した。

#### 4. 研究成果

質問票は、(A)2010年に沖縄県内大学生を対象に実施したアンケート調査の調査項目を基に作成し、5つのスケールで尋ねるものと、(B)大学生対象の同アンケートの記述回答に3回以上出現した語のうち、(A)の調査項目には含まれていない語について、使用の有無を尋ねるもの、計2種類を用意した。これに自由記述回答を加え、2011年～2012年に調査を実施した。調査票は、3,496件回収したが、データに欠損のある調査票を除外したところ、(A)の有効回答数は2,663件、(B)は3,266件になった。

##### (1) 質問票(A)の評定結果

###### 度数分布

①大学生の調査結果では全体的な傾向としてウチナーヤマトゥグチを「自分は使う」と回答した割合が高く、伝統的な方言を「自分は使う」と回答した割合が低かったが、高校生も同じ結果であった。が、高校生は「自分は使う」と回答した割合が90%以上に達している語はない。

割合	語
90%以上	
80～89.9%	「じょうとう」「～はず」
70～79.9%	「トイレル」「モップする」「～ようね～ましようね」「～(し)きれない」「(布団を)かぶる」「(髪を)洗う」
60～69.9%	「(髪を)洗う」「～(髪を)洗う」「～(髪を)洗う」「(着る物が)せまむ」「(眼を)かぶる」「(眼を)かぶる」「(木)を切る」
50～59.9%	「ちや～する」「やな～」「(木)を切る」「(木)を切る」
40～49.9%	「(木)を切る」「(木)を切る」「ふりむん」「やな～」「ゆんたくする」「(歯を)かぶる」「にりる」「あわてる」
30～39.9%	「おぼする」「たんちや～」「ふら～」「ゆくさ～」「しんかす」
20～29.9%	「いんたいてくがさむ」「(歯を)かぶる」「(歯を)かぶる」「ちゅーばー」「とるばやー」「あじく～たー」「いみくじわらん」「(数を)よむ」
10～19.9%	「よーがりひーがり」「なんくるないさ」「～じょーぐー」「めーごーさー」「ちばりよー」
9.9%以下	「がーじゅー」「くわちー」「びーらー」「よーがらー」

図1 「自分は使う」と評定した語の頻度順  
斜体・下線ありは、ウチナーヤマトゥグチ

②「自分は使う」と回答した割合が最も高かった語は「じょうとう(80.8%)」と「はず(88.8%)」で、これは大学生の統計結果と同じである。

③社会的にまたはマスコミを通じてよく知られていると思われる伝統的な方言(「ちゅーばー〔強い人〕(20.3%)」「ちばりよー〔ごちそう〕(19.6%)」「めーごーさー〔げんこつすること〕(14.0%)」「なんくるないさ〔何とかなるさ〕(11.0%)」)や伝統的な生活習慣・精神文化を反映する語(「あじく～たー〔味にこくがある〕(27.0%)」「がちまやー〔食いしん坊〕(25.7%)」「じょーぐー〔～好き〕(11.8%)」「なんくるないさ〔何とかなるさ〕(11.0%)」「くわちー〔ご馳走〕(4.1%)」)は大学生で「自分は使う」と回答した割合が低かったが、高校生はさらに低い。

④「自分は使わないし、聞いたこともない」と回答した割合は全体としては高くない。が、その中でウチナーヤマトゥグチが9.9%以下に集中しているのに対し、方言は10%～69.9%の間に分布している。

割合	語
90%以上	
80～89.9%	
70～79.9%	
60～69.9%	「びーらー」
50～59.9%	
40～49.9%	
30～39.9%	「くわちー」「よーがらー」「(数を)よむ」
20～29.9%	「いんたいてくがさむ」「よーがりひーがり」「歯をきしー〔歯をきり〕」「がーじゅー」「～じょーぐー」
10～19.9%	「おぼする」「～(髪を)洗う」「なんくるないさ」「とるばやー」「ゆくさ～」「あじく～たー」「いみくじわらん」「(歯を)かぶる」「しんかす」「あわてる」「(木)を切る」
9.9%以下	「じょうとう」「トイレル」「モップする」「～はず」「～ようね～ましようね」「～(し)きれない」「(木)を切る」「～(髪を)洗う」「～(髪を)洗う」「～(髪を)洗う」「(着る物が)せまむ」「(眼を)かぶる」「(眼を)かぶる」「(木)を切る」「ちや～する」「やな～」「(木)を切る」「(木)を切る」「ふりむん」「やな～」「ゆんたくする」「(歯を)かぶる」「にりる」「あわてる」

図2 「自分は使わないし、聞いたこともない」と評定した語の頻度順

##### クロス集計

①両親の出身と沖縄語の使用の間に有意な関連性が認められた。両親が「どちらも県内出身」の生徒は、両親の出身が「どちらも県外」「どちらかが県内」の生徒に比べ、「自分は使う」と答える割合が高い。

②将来の志向と沖縄語の使用の間に有意な関連性が認められた。将来県内で進学・就職を希望している生徒は、「将来県外で進学・就職を希望している」と答えた生徒、「わからない」生徒に比べ、「自分は使う」と答える割合が高い。

③沖縄語と地域の間に関連性が認められた。他地域に比べて南部が沖縄語を使用する割合が見られる。

##### 平均値の比較

沖縄語の使用に対して、積極的使用、消極的使用、無関心の各々の得点を、性別、両親の出身(3群)、将来の志向(3群)、地域(4群)で比較を行った結果、

- ①積極的使用では、女性の方が高い(t検定)。
- ②積極的使用は、両親がどちらも県内出身(分散分析)。
- ③積極的使用は、将来の志向が県内での進学・就職希望(分散分析)。
- ④積極的使用は、南部地域が高い(分散分析)。

##### (2) 質問票(B)の評定結果

###### 度数分布

①大学生の記述回答結果10位以内に入っている語は、「自分は使う」と回答した割合が60%以上に入っている。

順位	語彙	順位	語彙
1位	でーじ<副詞> 〔とても〕	6位	あふあ<名詞> 〔きまずい、恥ずかしい〕
2位	しに<副詞> 〔ほんとうに〕		あんまさい<形容詞> 〔面倒くさい〕
3位	方言+～する<する動詞>	8位	～どー<終助詞> 〔～ぞ、～だよ〕
4位	あがつ<感動詞> 〔痛っ〕	9位	～だばー<終助詞> 〔～なんだ、～なのか〕
5位	やー<名詞> 〔おまえ〕		だーる<感動詞> 〔そうだ、そうなんだ〕

図3 出現数の多かった語(大学生の記述回答結果)

⑧同じ形の語でも、意味・用法が異なると、使用する割合が異なる場合がある。

例1) てーげー「自分は使う」と回答した割合

a)	名詞〔適当〕	80～89.9%台
b)	副詞〔適当〕	60～69.9%台

例2) はごー「自分は使う」と回答した割合

a)	名詞〔汚れの汚さ〕	50～59.9%台
b)	名詞〔性格的な汚さ〕	30～39.9%台

#### クロス集計

①学年、性別、地域、両親の出身、将来の志向のうち、学年については有意差が見られない。

②「自分は使う」と回答した割合が高いのは、

男性  
将来の志向が県内希望  
両親がどちらも県内出身  
南部地域

#### 平均値の比較

「自分は使う」について、

①男性の方が有意に高い(t検定)

②将来の志向では、県内希望が有意に高く、県外希望が有意に低い(分散分析)

③両親出身は、どちらも県内出身が有意に高く、どちらも県外出身が有意に低い(分散分析)

④地域間比較でも有意で、南部、中部、那覇・浦添、北部の順であった(分散分析)

⑤沖縄の言葉の使用の程度(3群)で、実際の言葉の使用程度を比較したところ、フェイスシートで「よく使っている」と答えた高校生の得点が有意に高い(分散分析)

⑥フェイスシートで沖縄の言葉が「よくわかる」と答えた高校生の「自分は使う」と答えた得点が有意に高い(分散分析)

#### (3) 自由記述回答の結果

自由記述回答は、「日頃使っている『沖縄の言葉』を例文をつけて書く」よう指示した。その結果、3,496名中、全回答者の3分の1にあたる1,211名から回答を得た(男性696名、女性502名、性別の無記入13名)なお、分析にあたって、同じ語と判断できるものは1つの語と考えた。その結果、述べ語数は4,077語、異なり語数は767語になった。

#### 大学生の調査結果との比較

高校生の結果は、語の出現数、品詞別出現数、語種別出現数、語と文の割合全てにおいて大学生の結果と同じ傾向であった。

①語の出現数は「する動詞」が最も多く、大学生の調査10位内に入っていた「っやー[ʔja:]「おまえ」「しに〔本当に、とても〕副詞」「あんまさい〔めんどくさい〕形

容詞」は高校生の調査においても10位以内であった。

順位	語	順位	語
1	～する	6	あんまさい〔めんどくさい〕
2	っやー[ʔja:] 〔おまえ〕	7	～や(ー)終助詞
3	～よ(ー)終助詞	8	ちら〔顔〕
4	やな～ 接頭辞	9	～ば(ー)終助詞
5	しに〔本当に、とても〕	10	にりー〔飽きる〕

図4 語の出現数 [ ]内は、意味

②品詞別出現数は名詞が最も多く(37%)次に動詞(9.77%)、終助詞(9.11%)であった。

順位	語	順位	語
1	名詞 37.37%	6	感動詞 6.14%
2	動詞 9.79%	7	代名詞 4.14%
3	終助詞 8.96%	8	する動詞 3.28%
4	形容詞 6.48%	9	オノマトペ 3.02%
5	副詞 6.45%	10	接頭辞 2.55%

図5 品詞別出現数

③語種別出現数は方言が最も多かったが(78.76%)、共通語が次に多く(7.31%)、語尾が共通語になっている方言がこれに続いた(6.82%)。ウチナーヤマトウグチは3.63%であった。

④語と文の割合は単独の語が最も多く(51.99%)次に2語以上の語の組み合わせ(24.43%)、文(23.57%)であった。なお、方言のみで書かれていた文は、709文中20文で、0.028%だった。

#### 高校生の使用する沖縄語の傾向

①「うしえーいん〔侮る、バカにする〕」が「うしえる」に、「かしまさん〔うるさい〕」が「かしまさい」になるように、方言の動詞や形容詞の語尾を共通語の語形にして使用している。

②全国共通語では、口に出して言いにくい言葉(隠語、卑俗な言葉、脅し言葉など)を方言で使用している。

③身近な動物や食材・食べ物の方言はよく知っている。

④人を表す方言で、乱暴な言葉、人を見下したり差別するような言葉が見られる。

㊦「する動詞」の「～する」の「～」の部分は、半数以上が方言のオノマトペで占められている。

㊧テレビやラジオ放送、CM、アニメなどで使われる決まり文句がみられる。

㊨沖縄方言に特徴的な喉頭破裂音が共通語に近づいた発音になっている。

㊩語中および語尾の長音に、地域による発音の違いが見られない。

㊪語尾の長音化 = 沖縄の言葉という認識がある。

㊫伝統的な方言にはない言葉の使用が見られる。

#### (4) 評定結果と自由記述回答結果のまとめ 消えていく言葉

㊬調査票(A)の「自分は使う」の評定結果では、ウチナーヤマトウグチは60%以上に集中し、方言が29.9%以下に集中しているところから、方言の幾つかは将来的に失われていく可能性のある言葉として捉えることができる。

㊭伝統的な生活習慣・精神文化を反映する語は、大学生以上に高校生が「自分は使う」と評定した結果が低かったことから、これらの語が将来的に残るか否かは伝統的な習慣や行事等が今後どれだけ受け継がれていくかによるところが大きいと思われる。

㊮高校生が方言の動詞と形容詞の語尾を共通語の語形にして使っていることから、方言の動詞及び形容詞の活用形は失われていく可能性が高い。

㊯沖縄方言に特徴的な喉頭破裂音が共通語に近づいた発音になっており、口頭破裂音は失われていく可能性が高い。

㊰語中や語尾の長音は地域差があるはずなのだが、高校生が記述した限りにおいては、特定地域に限らないことから、地域差が失われ、全体的にバリエーションが分布していく可能性がある。

#### 残っていく言葉

㊱高校生は方言の動詞と形容詞の語尾を共通語の語形にして使っていることから、一部の方言の動詞及び形容詞は共通語の活用形を使うことによって残っていく可能性がある。

㊲大学生、高校生ともに品詞別順位は名詞が最も高かった。また、「する動詞」の出現数も高かったことから、「方言の名詞+する」動詞は残っていくと思われる(ただし、高校生の記述回答では、方言の名詞の半数以上がオノマトペで占められていた)。

㊳名詞の中では、日常的に目にする機会が多い動物の語、日常よく口に作る食材や食べ物語は残っていくと思われる。

㊴自由記述回答の品詞別出現数で名詞は約4割近くを占めているが、その中でも、人を表す語は14%を占める。高校生は、方言だけでなく共通語や英語にも、人を表す接尾辞

「+やー」や「+あー」をつけて(ちょうど英語の「er」をつけるような形で)人を表す語を作っているため、こうした語は今後も生産されていく可能性がある。

㊵「でーじ」「しに」以外に、程度を表す副詞のバリエーションが多く、今後も使用が増えていく可能性がある。

#### (5) 今後の展望

高校生も大学生も、文レベルの方言使用は1%に満たない状況で、単独の語レベルの方言使用が50%を占めることから、文レベルでの語の使用が不可能になってきている状況が窺える。文レベルの回答例を見ると、下記例文の下線部分に見られるように、方言の助詞や活用形が使えていない状況で、若者の多くは、共通語を文の核にして、そこにウチナーヤマトウグチや方言をはめ込んだ形で話しているようだ。

例) まちぐあーに 行って くる。

〔町に行ってくる〕

こしやみー してる やっさー。

〔腰が痛い〕

また、例えば、「にふえーでーびる」「どし」「ていーだ」「くわっちー」など方言の音声学的に表記している生徒がいる一方、全体的には表記や意味の使用に伝統的な方言とのズレが見られる。

沖縄県は「しまくとぅば普及推進計画」を策定し、学校での方言教育を始めようとしており、那覇市では、すでに市内の小中学生を対象に、場面会話中心の「しまくとぅば」(沖縄の言葉)を紹介する冊子を作成・配布している。短期的には場面会話は必要であろうが、長期的な展望にたつて方言教育を行う場合、場面会話に止まらず、文法や音韻体系などを体系的に教える必要があるだろう。

一方、高校生は方言に共通語の要素を取り入れたり、共通語と組み合わせたりして、「新しい沖縄の語」とも言える言葉を作っている。また、方言の伝統的な発音が共通語の発音に近づいている状況も見られる。これらのことから、「発音しやすい」「組み合わせしやすい」「メディアを通して頻繁に耳にする/目にする」言葉が将来的にも残っていく可能性が指摘できる。同時に、方言が語彙面、音声面で変化していく可能性も指摘できる。

#### 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

佐々木香代子、尚真貴子、狩俣幸子、記述回答結果から見る(沖縄)県内高校生の地域の言葉の使用について、社会言語科学会、2014年3月15日、神田外語大学

佐々木香代子、尚真貴子、狩俣幸子、質問肢による調査結果から見る沖縄県内高校生の沖縄の言葉の使用について、社会言語科学会、2013年9月8日、信州大学

〔その他〕

佐々木香代子、尚真貴子、狩俣幸子、田中寛二、高校生の沖縄語使用についての調査・研究：消えていく言葉の中で何が残っていくか？、平成 23 年度～25 年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書、2014 年 3 月

佐々木香代子、尚真貴子、狩俣幸子、記述回答結果から見る（沖縄）県内高校生の地域の言葉の使用について、社会言語科学会第 33 回大会発表論文集 32 - 35、2014

佐々木香代子、尚真貴子、狩俣幸子、質問肢による調査結果から見る沖縄県内高校生の沖縄の言葉の使用について、社会言語科学会第 32 回大会発表論文集 132-135、2013

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

佐々木 香代子（SASAKI, Kayoko）  
琉球大学・留学生センター・准教授  
研究者番号：6 0 3 0 5 2 1 6

### (2)研究分担者

尚 真貴子（SHOO, Makiko）  
沖縄国際大学・総合文化学部・准教授  
研究者番号：8 0 3 4 1 6 6 8

狩俣 幸子（KARIMATA, Yukiko）  
琉球大学・法文学部・非常勤講師  
研究者番号：9 0 5 3 6 6 9 0

### (3)連携研究者

田中 寛二（TANAKA, Kanji）  
琉球大学・法文学部・准教授  
研究者番号：4 0 2 5 3 9 4 2